

Nagoya Urban Institute News Letter ニュースレター

名古屋都市センター

2015.10 vol.104

愛・地球博の遺したもの



名古屋市内で見られる多彩な緑化技術

[特集]

環境意識の向上と ボランティア活動の定着

「愛・地球博」の遺したもの

Contents

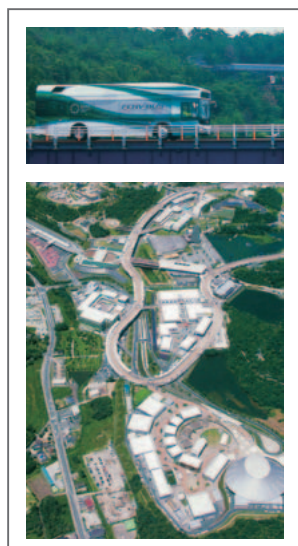
【特集】環境意識の向上と ボランティア活動の定着 「愛・地球博」の遺したもの	1～3
PERSON	4
なごやのまち今昔	5
研究報告書	6～7
まちづくり活動支援	8～9
まちづくり来ぶり	10
活動報告	11
お知らせ	12



多くの市民が参加した「名古屋気温測定調査2005」



壊れたおもちゃを直す「モリゾー・キッコロおもちゃ病院」のボランティア活動

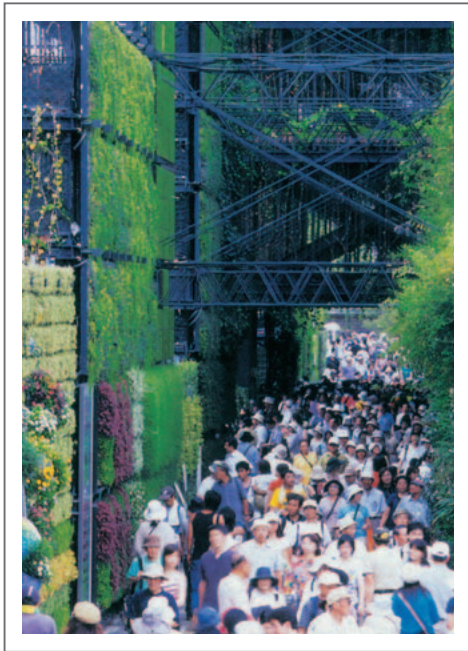
愛・地球博の会場間を運行した「燃料電池バス」(上)
と長久手のメイン会場(下)

自然の仕組みとの調和をめざす提案が行政、産業、 市民活動などに影響

21世紀最初の万国博覧会「愛・地球博」が、長久手、瀬戸を会場とする名古屋東部丘陵で2005年に開催されてから、ことして10周年となりました。従来の国威発揚型や開発型から大きく方針を転換。テーマは「自然の叡智」。自然の仕組みと調和した文明の構築をめざし、環境に配慮した社会行動やシステムを提案する画期的な博覧会でした。121カ国4国際機関が参加し、3月から9月までの開催期間に会場を訪れたのは約2200万人。多くの人々の記憶に残るとともに、その後の行政、産業、市民活動などに影響を与えることとなりました。10周年を機に「愛・地球博」の意義を振り返るとともに、それが地域や人々にもたらしたさまざまな遺産を探ってみました。



「愛・地球博」の遺したもの



愛・地球博の会場で展示された緑化壁「バイオ・ラング」



市内で見られる緑化壁

地球環境を視野に入れた 21世紀型万博のさががけ

愛・地球博の開催までの経緯は、必ずしも順調なものではありませんでした。会場予定地だった海上の森（瀬戸会場）で絶滅危惧種のオオタカの巣が確認されたことで、市民団体などが抗議。また跡地利用の住宅開発計画に対する博覧会国際事務局（BIE）の懸念なども表面化しました。こうした声を受け、メイン会場を愛知青少年公園（長久手会場）に変更。住宅開発計画も撤回しました。そしてさまざまな議論を経て、開催テーマ「自然の叡智^{かいしよ}」が打ち出されました。

また開催に向けた合意形成の過程で、主催者側と市民とのコミュニケーションが深まり、開催前の会場構成や企画の段階から市民が積極的に参加。市民、ボランティア、団体などが運営をサポートする万博史上初といわれる市民参加型の大会となりました。当初懸念を示したBIEも、会期中に異例の「祝意と賛辞」宣言を決議しました。

大会の成功により愛・地球博は、2002年国連総会で決議された「持続可能な社会のための教育（ESD）10年」のリーディングプロジェクトに位置付けられると、国際社会から評価されることになりました。また、名古屋をメイン会場として開かれた2010年の「生物多様性条約第10回締約国会議」（COP10）、同じく2014年の「ESDに関するユネスコ世界会議」を成功に導くバックグラウンドともなりました。

緑地のヒートアイランド抑制効果を 市民連携で大規模調査

愛・地球博の開催と成功は、環境への取り組みで各方面にさまざま

な影響を与えました。名古屋市は、愛・地球博による環境意識の高まりなどを踏まえ、開催翌年の2006年に「第2次環境基本計画」を策定。2010年度を目標年度として「健康で安全な都市」「循環する都市」「人と自然が共生する快適な都市」「地球環境保全に貢献する都市」の4つの目標を掲げました。さらに2011年には、2020年度を目標年度とする「第3次環境基本計画」を策定。ここでは「水の復活」「低炭素都市」「生物多様性」の3つの戦略をふまえて「2050年の環境都市ビジョン」を描き、2020年までの施策の大綱を策定しています。

また愛・地球博を機に、さまざまな環境調査が行われるようになりました。例えば緑地によるヒートアイランド抑制効果を測定する「名古屋気温測定調査2005」もその一つです。これは2005年8月、市民、行政、専門家の約400人が連携し、名古屋東部丘陵や市内の合計200カ所で緑地と気温の関係を徹底調査。都市環境への緑地効果を詳細データで裏付ける成果を得ました。さらに最初の調査から10年を経た2015年8月、豊田、多治見、春日井、瀬戸も参加し、データの規模も活動もよりスケールアップして2回目の調査が行われました。

環境の先端技術で 万博の風景が都市の日常の中に

環境負荷の少ない循環型社会をめざす先端技術も、愛・地球博で注目を集めました。例えば会場の移動手段として運行したのは「燃料電池バス」です。ガソリンではなく、水素と空気中の酸素の化学反応で発電して走ります。排気ガスが出ないので環境に負荷を与えません。これは自動車メーカーが共同開発。その後、燃料電池で動く乗用車を開発し、究極のエコカーとして市場に投入しています。

また万博会場中央にそびえる世界最大級の緑化壁「バイオ・ラング」も話題になりました。これは生物を意味する「バイオ」と肺の「ラング」を組み合わせた言葉で、緑の肺の呼吸に伴い光と水と空気を循環させ都市緑化を進めようというものです。名古屋市では減少する緑を回復するため、一定規模以上の敷地に建てられる建築物には、指定面積以上の緑化を義務付ける「緑化地域制度」が導入されています。ここでも壁面緑化、屋上緑化など愛・地球博で提案された技術が活かされています。

地域に浸透するボランティア

ボランティアの支えがなければ、愛・地球博の成功は難しかったかもしれません。総数約3万人、活動者数延べ約11万人のボランティアが会場の案内、高齢者や障害者のサポート、ごみの分別案内などで活躍しました。その拠点となったのが「愛・地球博ボランティアセンター」です。「国際」「福祉」「エコ」などさまざまな分野で専門的な見識と経験を持つボランティアが中心となって活動。研修を繰り返すなど質の高い活動を進めていました。

愛・地球博閉幕後、NPO 法人として再スタート。万博での経験やノウハウを活かし、地域で活動の幅を広げています。例えば、そこに集う団体の一つ「森林を守るバナナクラブ」は、会場でバナナの茎からはがきをつくるコーナーのサポートメンバーが立ち上げたグループ。地域での活動が評価され、現在、小学校の環境学習を受け持つようになっています。

「万博瀬戸ボラセンの会」は、瀬戸会場で活動したボランティアが立ち上げたグループ。缶バッジや竹細工の工作教室を子供たち相手に実施。夏には「流しソーメン大会」、冬には「餅つき大会」を行っています。「モリゾー・キッコロおもちゃ病院」は、各地の会場を移動しながら「もったいない」を体験から学んでもらおうと壊れたおもちゃを直しています。多くのボランティアグループが愛・地球博の情熱と精神を受け継ぎ、地域に浸透し活動を続けています。



「名古屋気温測定調査2005」の記録作業



「紙芝居クラブ」のボランティア活動



バナナの茎を再利用する「森林を守るバナナクラブ」のボランティア活動

自然との付き合い方も人間関係も 大切なのは多様性を重視することです

名城大学 農学部生物環境科学科 教授

丸山 宏さん

原生林には自然や生物の独自で多様な循環がありますが、人の手が入るとそれが変わります。しかし原生林の循環の外で多様な森や緑を再生し育てていくには、やはり人の手が必要になります。森は人間にとって生命維持のための原関係であり、心をやす原風景です。森や緑は人間にとって不可欠なのです。大切なのは、それらとどう付き合うかです。

都市や近郊には、里山、自然公園、街路樹など色々な緑がありますが、それらを育てていくには土地の風土や歴史を理解することも必要です。長い時間をかけて成長してきた、その土地ならではの森や緑があるからです。自然との付き合い方で大切なのは、風土や歴史の個性、多様性を重視することです。

愛・地球博の意義は、それらを「自然の叡智」として地球環境のスケールで問題提起し、解決を試みるシステムや行動を提案したことです。あのイベントで市民の環境意識は、大きく変わったと思います。それからボランティア活動を通して人が動くようになった。都市化によって失われたコミュニティに替わる、新しいネットワークが育っています。そこには意見の対立もありますが、多様な主張から新しいものが生まれます。行政がその調整役を果たすべきだと思います。

